

ように、車は速くて便利ですが、一つのミスで大きな事故につながる、爆弾の
 恐怖は今でも下校中に、車にはねられそうになりました。その時感じた
 は、大きなミスで、分けて二つあります。その原因として考えられることは、
 おそらく、これが原因だったと思います。私がひかれそうになったときは、
 を確認し、私と友達の間を走って、その途中で車が
 動き出し、危ない状況で、クルリと回った。これは、ブレーキを踏んだ
 のに、一つのミスで、危険な状況で、起きる可能性がある。このように、ド
 意を二つに分けて、急行者の注意不足など、歩行者も見かけますが、それ
 故に、この二つのミスで、危険な状況で、起きる可能性がある。このように、ド
 たが、この二つのミスで、危険な状況で、起きる可能性がある。このように、ド
 や、理由が、危険な状況で、起きる可能性がある。このように、ド
 な、理由が、危険な状況で、起きる可能性がある。このように、ド
 方々、危険な状況で、起きる可能性がある。このように、ド
 事、危険な状況で、起きる可能性がある。このように、ド
 ん、危険な状況で、起きる可能性がある。このように、ド
 ま、危険な状況で、起きる可能性がある。このように、ド
 なければ、危険な状況で、起きる可能性がある。このように、ド
 が、危険な状況で、起きる可能性がある。このように、ド
 び、危険な状況で、起きる可能性がある。このように、ド
 陰、危険な状況で、起きる可能性がある。このように、ド
 険、危険な状況で、起きる可能性がある。このように、ド
 性に、危険な状況で、起きる可能性がある。このように、ド
 考、危険な状況で、起きる可能性がある。このように、ド
 の、危険な状況で、起きる可能性がある。このように、ド

中学生の部

* 作品は原文のまま掲載しています。

宮城県教育長賞

あの日の出来事

石巻市立石巻中学校 一年 鈴木 優 日

「ドンッ」
これは、私が六年生の時の話だ。その日は夜遅くまで、家族で出かけていた。帰り道、信号は黄色に点滅しており、母はいつもより周りに注意して走行していた。家の近くの交差点に差し掛かり、母は一時停止するためスピードをゆっくり落としていた。
その時だった。右側から、スピードを落とすことなく、車が走ってきたのだ。
「危ない！」母がそう言った時には、もう遅かった。右側から走ってきた車と左側から走ってきた車がかかりのスピードでぶつかったのだ。幸い、両方の車が大型車だったこともあり、損傷が少なく中に乗っていた人は無事だったという。
家に帰ってから、私の頭の中は事故のことがいっぱいだった。もしあの時、母がスピードを落とさず進んでいたら、家族全員無事ではいられなかったかもしれない。そう考えるととても恐ろしくなった。
今でもこの話を母にすると、
「本当にあの時のことは忘れられない」と言う。この出来事は、私が交通安全について考えるきっかけになった。今まで分かった気になっていたことも、しっかりと学び、知っていかうと思った。
そして、私たちが交通事故にあわないようにいつも校門の前に立っている先生、交通量の多い交差点で黄色い旗を持って横断歩道を安全に渡れるように見守ってくれる地域ボランティアの方々に感謝しなければいけないと思った。私はその日から、先生やボランティアさん達に、
「いつもありがとうございます」と必ず言うようにしている。
車は、生活になくてはならないものだ。世界中の人々が日々、車を使い生活をしている。車は便利で、ルールを守れば決して危険な乗り物ではない。しかし、使い方が次第では、尊い人の命をうばってしまう乗り物にもなりうる。だからしっかりとときまりを守って扱うことが大切だと、私は思う。そして、きまりを守らなければいけないのは、車を運転している人だけではない。歩行者だってそうだ。急にとび出したり、道路で遊んだり、してはいけないことがたくさんある。
私はこれからは大人になり、車の免許を取り、車を運転することになるかもしれない。その時は、しっかりとときまりを守って乗れる人であらうと心から思う。そして、この出来事を通じて、感じた事、考えた事を忘れないでこれからにつないでいきたい。

一般社団法人宮城県交通安全協会会長賞

小さな行動

仙台市立折立中学校 一年 林 奈 瑚

「あー、なんでこんな...」
母が朝のニュースを見てため息をついている。交通事故のニュースだ。確かにニュースキャスターが暗い顔で事故のニュースを読んでいるのを毎日のように目にする。中には小さい子供が大人の不注意で命を落としてしまう事故もあり、私も母と同じくため息をつく。こんなに毎日事故のニュースが流れているという事は、実際にはどの位の事故が起きているのか気になり調べてみた。
交通事故での死者数は、今年の6月末までで千六百六十一名とすでに千人を超えていた。平成二十七年は千八百九十二名で、十年前から比べると減ってはきているが、それでもとても少ないとは思えない。私の住む町でも、飲酒運転や高れい者の不注意による事故で命を落としている人たちがいることを知り、もしも私の家族や大切な人たちが事故にあったらと思うと、胸がぎゅっとしめ付けられる。悲しい思いをする人達が少しでも減るように私ができることはないのだろうか。
私の出身の小学校では、一年生の始めの交通安全教室で必ず教えてもらうことがある。横断歩道を渡る時、ゆずってくれた車に対して渡った後にくるりと振り返り、お礼のおじぎをすることだ。私の住む地域ではもう当たり前の光景だが、前に祖母が遊びに来た時にその光景を見て感動していたことを思い出した。
「とっても素敵な習慣だね、運転している方もゆずって良かったなと思うし、横断歩道が近づいてきたら誰か渡る人がいないか注意をしようっていう気持ちになるよね。」
と祖母は言っていたけれど、その時はただそんなものかと思っただけだった。小学校で教えてもらったのは、「ゆずってくれた人にきちんとお礼をすること」だと思っていたけれど、それだけでなく、祖母の言うようにこの小さな行動が運転手の意識を変えられるのであれば、それはとてもすごいことなのではないかと今は思う。中学生になり、正直は少しさもあり今はやめてしまっていたが、すごく小さいことだけれど、これは私のできる交通事故防止の一つとしてこれから先も続けていきたいと思う。このようなとても小さな一人一人の意識の積み重ねがほんどん広がって、交通事故で命を落とす人がなくなり、母が朝にため息をつくこともなくなればいいなと思う。

中学生の部

宮城県PTA連合会会長賞

仙台市立折立中学校 二年 石井 日葉璃

作文の部 応募作品数

小学校 1 ～ 3 年生の部	2 1 作品
小学校 4 ～ 6 年生の部	4 0 作品
中学校の部	3 7 作品
合 計	9 8 作品